

2023年5月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 80

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

G7に先立って、市民社会版サミットに登壇してきました

※本記事は2023年5月5日執筆されました。

C7サミットとは？

G7サミットという名前はほとんどの方が聞いたことあるかと思います。日本を含む世界をリードする7カ国の首脳達が毎年集まり、世界のさまざまな課題について話し合う場となっています。主催はメンバーによる持ち回り制で、2023年は日本が主催国となり5月に広島で開催する予定です。

C7とは、G7（Group of Sevenの略）の公式エンゲージメントグループの一つで、Civil Society（市民社会）の『C』を使ってC7になっています。公式エンゲージメントグループには他にも、BusinessのB7やYouth（若者）のY7などがあります。このC7のサミットがG7サミットに先立って、4月に東京で開催されました。私はこの中の「人道支援と紛争」ワーキンググループの分科会に登壇してきました。

受動的支援から能動的支援へ

わたしが登壇した分科会は「Reactive to Proactive Response（受動的支援から能動的支援）」をテーマに、わたしの他にもイギリスの中間支援団体やパキスタンの現地団体から登壇者がおり、世界的なNGOのネットワークICVAからモデレーターを招いて進められました。

BIG ANNOUNCEMENT!

**CWS JAPANは
「認定NPO法人」として
認定を取得しました。
今後、皆さまからの
ご寄付が税控除の対象
になります。**



写真

C7の全体会で登壇した山田賢治外務副大臣とC7運営メンバー ©CWS Japan

わかりにくい支援効果

一方で、ハザードマップと避難計画ができました、警戒を知らせる情報インフラが整備されました、どちらもその直接的成果は災害が発生しないと実感しにくい取り組みであり、最大の成果は「何も起こらない（＝被害が発生しない）」ということになります。

目の前にある危機的状況と将来のリスク軽減を比較すると、どうしても前者への注目の比重が高くなるのは仕方ないかもしれません。こうしたことから、例えば海外の政府の緊急人道支援向けの助成金では、その総額の一定の割合を防災の取り組みにしなければならないと義務付けられているケースもあります。

例えば、現在実施中のアフガニスタン東部地震被災者支援では、仮設住宅を建設するだけでなく、同時に耐震構造についての仕組みと技術の研修を、広く現地コミュニティ向けに開催し、余震や次の地震に備えられた住宅が復興の中でも建設されていくことを目指しています。

[illegible]

写真
グラフィックレコーディングでまとめら
れた分科会の内容 ©CWS Japan

説明責任とアドボカシー・啓発

わかりにくい支援（しかし大切な支援）の資金調達における最大の課題は、その活動を支えてくれる人たちに対する説明責任です。政府およびその助成金に支えられている取り組みの場合は納税者に対して、NGOの場合はその寄付者や支えてくれる社会に対して、自分たちの活動の成果を透明性を持って丁寧に説明しなければなりません。そのため、直感的にわかりやすい支援や数値やカタチで結果が見やすい支援に支持が偏りがちです。

しかし、支援の実践者が本当にわかりやすい支援だけに集中してしまうと災害後の緊急支援ばかりに偏重し、防災への取り組みが手薄になり、地域と住民の能力と意識は高まらず

**"わかりにくい支援であっても
臆することなく取り組み、その重要性をわたしたちを支えてくれる人たちに丁寧
に説明する活動にも積極的に取り組んでいきたいと思います。"**

中長期的には同じような災害被害を繰り返してしまう可能性が高まってしまいます。こうした課題意識をもっているからこそ、今回のC7の機会を捉えて、日本だけでなく各国の政府に対して、対処療法的な緊急支援だけでなく、中長期的な視野から防災に取り組む政策を重視し、ハコモノ事業だけでなく人材育成や能力強化に積極的に投資していくように促しました。一方で、こうしたアドボカシー（政策提言）の活動は、社会に支えられて行うものなので、防災に取り組むわたしたち自身も社会に対して、その重要性を伝える啓発活動を行う必要があります。そこで政府に対して、説明と啓発を一緒に行うパートナーとして積極的に協働しましょうと提案しました。わかりにくい支援であっても意義のある支援活動であるならば、丁寧に説明責任を果たすことで、萎縮することなく取り組んでいきたいと思います。

最後に

災害直後の支援活動も当然ながら重要ですし、目の前で困難な状況にいる人を無視することはできません。一方で災害が起きるごとに同じ被害とそれに対する支援を繰り返しては、安心できる社会は実現できません。同様のことは、自然災害だけでなく難民支援においても言えます。平時から多様性を受け入れ、すべての人たちに優しい社会とその仕組みをつくるのが、突然不幸な状況に追い込まれてしまった人が発生しても、尊厳が尊重され、それ以上傷つくことなく、安心して立ち直れる素地になるのだと考えます。

わたしたちは、わかりにくい支援であっても臆することなく取り組み、その重要性をわたしたちを支えてくれる人たちに丁寧に説

明する活動にも積極的に取り組んでいきたいと思います。

支援者の皆さまとの対話・交流の機会も増やしていきたいと思いますので、ご参加いただければ嬉しいです。よろしくお願いいたします。

（文：プログラム・マネージャー 五十嵐豪）

ベトナム北部のコミュニティの力で防災力をあげていく

CWS JAPANでは、以前から外務省NGO連携無償資金協力の枠組みを活用し、ベトナム北部（TUYEN QUANG省CHIEM HOA県）の防災力向上を支援しています。これは3年間の事業なのですが、今年はその3年目にあたる年で、これまでの取り組みが集大成化してきました。

もともと、度重なる洪水や土砂災害に悩まされている少数民族が居住する地域であるベトナム北部において、防災力を高めることを目的に事業を立案し、実施してきました。今回は今まで達成できたことや、われわれが実際に、現地で見た変化をお伝えしたいと思います。



写真

ベトナム北部の事業対象地域：Chiem Hoa県 ©CWS

どこが危ないか

まず、「危ない場所」を特定するために、ハザードマップやコミュニティ防災マップが作成されました。日本では総称で「ハザードマ

ップ」と呼んでいます。われわれの事業では、用途を分かりやすくする為に、「リスクを表したものがハザードマップ」、そこから安全な避難経路や避難場所など、「リスクを削減する方法を示したのが防災マップ」と呼んでいます。

ベトナムの関係者はその両方を作成することができるようになり、それらの知識を地区防災計画に落とし込んでいます。CWS Japanの連携パートナーである国土防災技術株式会社の専門家による地形判読の技術指導も頂きました。これらによって、積極的にリスクを把握して、削減するという方法が確立されました。

いつ危ないか

また、「いつ危ないか」を知るためには雨量や河川の水位、そして斜面の動きなどを把握することが重要です。現地では以下の写真のように丁張を崩れる危険性のある場所に張り、その動きを見ることで、斜面がどのように動いているか、滑落する危険性があるか、などを把握してきました。以下の写真は、丁張の右半分は土砂とともに滑落した後の写真です。この真下に住んでいたコミュニティは、結果、斜面が崩壊する前に避難し、子ども達を含め、けが人も出ず、全員無事でした。



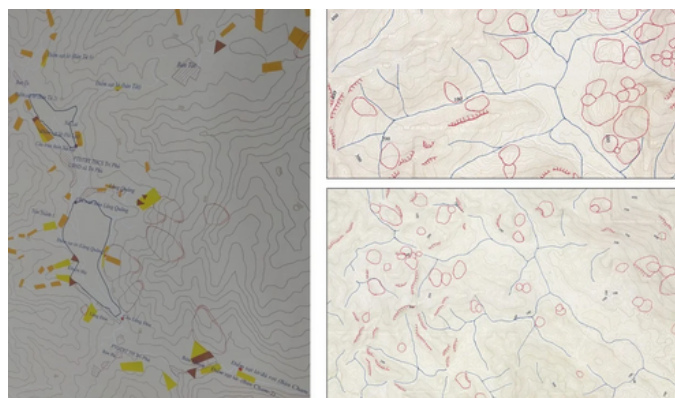
写真

崩壊した斜面 © CWS



写真

斜面にある亀裂をまたいで設置された丁張 © CWS



写真

リスクを精査し、表示したハザードマップや地形判読結果 © CWS

ちなみに丁張ですが、以下のように、木の板を組み合わせて作成します。亀裂などをまたぐように2つを一組として設置され、左と右が重なる部分（中央）がどのように動くかを観察することで、地面がどのように動いているかが分かります。

何を守りたいか

わたしたちは地球の変化と共に生き、自然と共生することが重要だと思っていますが、そのなかでも絶対に守りたいものには防御線を張る必要があります。

例えば、今回の対象コミュニティで非常に重要視されている農地があり、地元の農業や食、そして仕事を支えています。その農地が度重なる洪水による河岸浸食で失われてしまうかもしれないという、大きな危機感をコミュニティは持っていました。そこで、河岸浸食からこの農地を守るために蛇籠を使いとした防護壁を作りました。以下の写真であるように、現地のコミュニティ自身が工事のモニタリングを行い（技術的なモニタリング事項はトレーニングしました）、進捗を常に把握し、「自分たちの重要な資産だ」と言いながら主体的に作りこまれていきました。

土砂の流出を防止するシートを蛇籠の後ろに敷き詰めること、工事のために土を掘った所に埋め戻しをしたところのコンパクション

（土を締め固める過程）の徹底、針金が飛び出ているところの適切な処理など、日本の専門家にご指導頂いたポイントは全て実施されていました。それを見た時に、このコミュニティの本気度が伝わってきました。



写真

施工にコミュニティが積極的に参加する様子 © CWS

今後に向けて

この3年間の取り組みで、ベトナム北部において、どのようにリスクを捉え、モニタリングし、削減していけるか、という一つのモデルが確立できました。同様のリスクに悩まされている他の県や地域にさらに横展開できると考えています。

日本もベトナムも、「大切なヒト・モノ・トキを守りたい」という気持ちは同じです。そして、地球の変化と共存しなければならないという人間のサガも同様です。であるならば、協力して、お互い学びたい、よりうまく自然と共存できるようになりたいと思います。

「たった一人のためにでも、世界をつなげたい」。CWS Japanではそのスローガンとともに、さらなる防災協力を推進してまいります。

（文：事務局長 小美野 剛）

レジリエンスとは、 強靱？ 屈強？ 頑強？

少し前の話になりますが、CWS Japanは、2021年4月にインドネシア東ヌサ・トゥンガラ州に上陸したサイクロン・セロージャの被災者支援を2022年1月まで実施しました。

支援を終えて、時間がしばらくたったタイミングで、対象地域にてわたしたちが実施した活動がどのようなインパクトを生み出しているのか、または残しているのかを調査しに現地に行ってきましたので、そのご報告をさせていただきます。

事業概要

被災者支援事業では、次の3つの活動を実施していました。

1. 危険な構造物の下や屋外などの劣悪な環境下で避難生活を送っている被災世帯に対し、衛生用品、生活用品、そして一時的な避難場所として緊急シェルターキット（テント用品）を提供すること。これらの物資の配布と同時に、新型コロナウイルス感染症やそのほか感染症予防のための啓発を目的としたセッション（衛生促進セッション）を各世帯にて実施しました。
2. 同災害により汚染した井戸を修復すること。1、2の活動を通して、被災後の劣悪な環境による感染症などの二次災害を予防することを目指しました。
3. さいごに、どのように災害が発生したのか、また地域における災害のリスクはどこにあるかなどへの理解を深めるために、災害リスク評価を実施し、ハザードマップを作成したのち、防災アクションプランも策定することです。



写真

物資支援の様子 © CWS

活動結果

1. 最終的に当初計画よりも327世帯多い1,011世帯に各物資を届けることができました。また、事業終了時の裨益者へのインタビューの結果から、衛生促進セッションを受講した被災家族684世帯の内80%（547世帯）が、よりよい衛生習慣に関する知識が増えたと回答しました。
2. 事業終了時には、当初計画通り対象村6村にある合計60基の井戸が修復・清掃され、684世帯が清潔で安全な水を利用できるように改善されました。なお、井戸維持管理委員会メンバーとなった600人が、主に「井戸維持管理委員の責任とは」「井戸の適切な使用方法」「日常の保守管理方法」「井戸維持管理における良い/悪い事例」等を学ぶトレーニングに参加し、事前・事後テストを受けた人の80%が井戸の操作やメンテナンス方法について正しい知識を得て、理解を深めることができました。
3. 対象村の行政職員、コミュニティ・リーダー、コミュニティ・メンバーからなる被災コミュニティの主要メンバー合計180人が、災害リスク評価、ハザードマップ作成、防災アクションプラン作成のプロセスに参加し、最終的に6村それぞれで防災アクションプランが作成されました。その結果、水災害に脆弱な地域や避難するための安全な地域が見える化され、被災コミュニティ内でこれらに対する理解が深まり、また防災アクションプランが策定されたことで、近い将来発生しうる災害に対し、同じような被災を回避できるように意識変容を促進しました。



写真

対象コミュニティ内で災害リスクの危険な場所について話し合っている様子 ©CWS

事業後しばらくのインパクト

支援終了後からおよそ半年たったタイミングで実施した現地調査では、3番目の防災支援活動において、CWS IndonesiaとCWS Japanが連携した支援の効果を確認すること、そして活動を展開する際に、最も脆弱な人々の巻き込みができていたかを確認することでした。6つの村で地理的などの条件が違う場所を選定し、3つの村を回り、インタビュー調査を行いました。

脆弱な人々の巻き込みや彼らの声を防災アクションプランに反映することは、3つの村において行われていました。計画の策定段階だけでなく、計画の実行においても彼らの巻き込みができるようにしており、事業終了後も継続して、彼らの参画が確保できるように、彼らに対しても村の防災に貢献できるような役割が割り当てられていました。

脆弱な人々の視点に配慮して決められたことの例としては、避難経路の特定、一時避難場所・場所の特定、トイレの設置などが挙げられます。継続的な村の防災活動における彼らの役割には、植林や灌漑の補修、高床式住居の建設に必要な資材の収集などの人手が必要な作業への貢献、障がい者・高齢者・妊産婦・子どもに関するデータを提供・収集し、村の行政に提供することなどです。

モデスタという支援対象村の女性の裨益者は、CWSの事業で学んだ最も重要なことは何ですか？という質問に対して、以下のように答えてくれました。

“CWSの活動に参加して、家畜の避難経路の計画や、避難時の行動が重要であることを学びました。特に、自力での移動が困難な障がい者が遠方に避難するための安全な家（高床式住居）の提供について話し合いました。また、私の家は比較的安全なので、近くに住んでいる人の緊急避難についても話し合いました。”

ヘンドリックという裨益者は、同じ質問に以下のように回答しました。

“災害発生時に、河川の上流と下流の住民の間で洪水リスクのコミュニケーションをとることの重要性を理解し、強化することです。”



写真

モデスタさんとヘンドリックスさん

©CWS

この活動を共同で実施した現地パートナー団体からは、緊急支援フェーズにおいて防災活動を支援の枠組みに入れることに関して、次のような意見を共有してくれました。

“防災支援に関しては、従来、緊急支援を必要とするフェーズではなく、平時の方が資金調達が容易です。食料や医療品などの命をつなぐ活動の方が喫緊のニーズと捉えられるため、緊急時には、防災に資金を割いてくれるドナーは少なく、本格的な防災を災害の記憶が鮮明なときに実施することが困難です。実際に被災した人々は、災害の記憶が薄れ、日常生活に戻った平時には、あまり防災活動に関心を示さない傾向があります。ですが、今回CWSと実施した防災支援では、災害直後に近いということもあり、裨益者は非常に熱心で真剣でした。”

事業期間で作成していた防災アクションプランの進捗度合いは、村ごとに若干ですがことなることがわかりました。計画の実行が最も活発だった村は、洪水リスクからコミュニティを守るためにチークの木を植えたり、毎年この地域を襲う台風の被害を減らすために収穫のタイミングを調整したりと、以前から自発的に防災活動に取り組んでいる村でした。他方で、計画の進捗が鈍い村は、これまで州の現地政府のイニシアチブによって防災活動が進められ来ておりました。村のメンバーは、防災アクションプランの実行に際し、報酬や対価がないことに不満を感じ、自主的な防災活動が重荷になっているようでした。

レジリエンス？

なぜ、村ごとでこのように防災活動へのモチベーションがかわってしまうのか？

また、CWSは防災活動を通して、災害にレジリエント（強靱）な地域をつくることを、現地パートナー団体と連携して進めてきましたが、対象地域の人々にとっての「レジリエンス」とは何なのか？が、CWS IndonesiaとCWS Japanのチーム内で疑問として挙がってきました。

このような問いの答えを模索すべく、事業終了後、約1年後のタイミングでもう一度、現地を訪問し、さらに詳細なインタビューを実施することになりました。現在、調査結果は分析・取り纏め中なのですが、インタビューをしながら、印象的だったことを紹介します。

"興味深かったのは、より災害にレジリエントになるために取り組むべきことについて聞くと、高齢者や障がい者への配慮やエンパワメント、食料安全保障の改善、貧困といった社会経済的脆弱性が挙げられたことです。"

まず、「レジリエンス」という言葉そのものが、インドネシアでは比較的最近に入ってきた言葉のため、そのまま使うのではなく、「レジリエンス」を違う言葉に置き換えたり、比喩を使ったり、どのような文脈で使われるのかを説明するところから始めました。日本ではよく「強靱な」と言い表したり、「しなやかな強さ」と表現されたりする場面が多いように感じます。現地インタビューのなかでは、固い石のよう？ゴムのよう？強い？穴が開かない？割れないということ？など色んな解釈が飛び交い、この説明だけで、1時間くらいかかったインタビューもありました。

インタビューの結果、主な傾向として、以下のような違いが浮かび上がりました。州の政府に対して、レジリエンスとは？と聞くと、大体がコミュニティに主語が置かれていて、コミュニティのエンパワメントを重

視していました。コミュニティの人々が災害リスクへの理解をしていて、防災の重要性について意識啓発がされている、防災に関する教育の機会がある。そのような状態が災害にレジリエンスであるという意見が挙がりました。

その一方で、コミュニティの人々に聞くと、レジリエンスとは防波堤をつくったりなどハード面での強化を強調する回答が多い印象を受けました。ただし、興味深かったのは、より災害にレジリエントになるために取り組むべきことについて聞くと、高齢者や障がい者への配慮やエンパワーメント、食料安全保障の改善、貧困といった社会経済的脆弱性が挙げられたことです。

この記事を読んでいるみなさんにとって、災害にレジリエントな地域とはどんな地域でしょうか？



写真

個別インタビューの様子。現地調査はCWS IndonesiaとCWS Japanのチームで実施しました。 ©CWS

現在、調査の結果は分析を進めているところですので、今回の報告はここまでになります。今後の調査の正式な結果の報告を楽しみにお待ちしております。

(文：プログラム・マネージャー西澤紫乃)

デザインの力、人と人をつなぐ力

この度、新しい団体のリーフレットができました。このリーフレットは、色んな方々のご意見やサポートがありできたもので、個人的にも、とても思い出の強い広報物になりました。

なので、ただ世にリリースするだけではなく、皆さんにも、どのような製作過程だったか共有しながら、そしてリーフレットに挿入されているイラスト製作を担っていただいたグラフィックイラストレーターさんの声をお届けしたいと思います。

チームでつくったリーフレット

リーフレットの製作は一人のインターン生から始まりました。

まずはどのような内容を盛り込むべきか、団体に関する情報を集め、整理したり、他の団体さんのリーフレットも参照したりしながら、一般の方々や初めてCWS Japanを知る人にもわかりやすく、また簡潔な文章を作成してもらいました。それをもとに職員みんなで「この情報はたしかにあったほうがいいね」「この表現は専門用語かな?」「この情報はウェブサイトで見てもらった方がいいかも」などと議論しながら、掲載していく情報を精査していきました。

そして、ある程度文字数が決まったところで、リーフレットのデザインです。こちらにも、いろんなデザインを考えました。はじめは、紙のリーフレットは配っても、そのうち捨てられてしまうのではないかな。それなら、捨てられないようなリーフレットとして、クリアファイルに印刷するのはどうか?というアイディアもでました。結果的に、文字量のバランスや携帯しやすいサイズなどを考慮した時に、三つ折りの紙のリーフレットが最適だという意見にまとまりました。その議論の過程で、チーム一人一人が誰にどのように渡そうとしているのかということが明確になり、また、それを受け取る側の利便性や受け取った際の印象を考えてみるよい時間になりました。(ちなみにクリアファイルは、別途、絶賛製作検討中です)

デザインも4種類ほどインターン生に用意してもらい、そのなかからどれが良いかチーム全員に投票してもらいました。チーム以外にも他のインターン生やCWS Japanの活動をボランティアとして支えてくださる方々、そしてニシザワの友人（笑）の間でも回覧しました。デザインの種類には、①入れたい情報を可能な限り詰めながら写真も入れたもの、②イラスト多めでポップな字体を採用した固さ控えめなもの、そして③英字表記も添えてデザインも情報量もシンプルにしたビジネスライクなものがありました。

投票の結果、写真が入ったものがいいという声もあり、①の案が採用されました。



最終案としては選ばれなかったデザインドラフトたち

そこから、ドラフト段階ではフリー素材で入っていたカットイラストなどをデザイナーさんに発注して一から作成していただくということで、出会ったのがオーストラリアを拠点に活動するグラフィックイラストレーター、はんとれーみえさんでした。

グラフィックイラストレーター はんとれーみえさんの声

ここからはインタビュー形式でお伝えしたいと思います。

（ニシザワ：以下、ニシ）今日はインタビューのお時間をいただきありがとうございます！早速ですが、みえさんのご経歴を教えてください。

（はんとれーみえさん：以下、みえ）わたしは、大阪市立工芸高等学校美術科に進学し、その当時から美術を学んでいました。大学でも京都芸術大学で芸術を専攻しました。卒業後

は、2年間勤務したアパレル企業でアパレルデザイン企画に携わりました。その後は、以前からボランティア活動をしたいと思っていたこともあり、高校で美術の非常勤講師を務めながら、たまたま読んだ新聞記事で知った在日外国人女性と子どもをエンパワメントすることを目的としたNPOのスタートメンバーの1人として通訳コーディネーターを始め、事務局員として働きました。

結婚を機にオーストラリアに渡ってからは、しばらく、デザインの世界からは離れていたのですが、一時本帰国中に就職していた企業で、チラシのデザインをしたところ、評判がよく、マーケティング部署に配属されることになりました。そこから社内外の広報物一般全てのデザインを任されることになり、デザインを再開することになりました。

オーストラリアに戻って以降、コロナ禍という環境も契機となり、現在は地元ゴールドコーストでCreative Pod Graphics というデザイン事務所を運営する傍ら、フリーランスのグラフィックイラストレーターとしても活動しています。



写真 ゴールドコーストの制作作業場 （はんとれーみえさんから提供）

（ニシ）今回、CWS Japanのリーフレットのイラスト制作を引き受けていただいた理由は何だったのでしょうか？

（みえ）過去にNPOの活動に携わった経験があり、今も深い思い入れがあります。当時勤めていたNPOの事務局長さんとは今も繋がっていて交流があります。なので、ニシザワさんか

らイラストマップ制作の依頼がきて、NP0の活動にいちクリエイターとして関わることが単純に嬉しかったです。

(ニシ) そうだったのですね！わたしもそれが聞けて、とても嬉しいです！今回、わたしたちが求めていたイラストのイメージはとても抽象的でボヤッとしたもので、わたしが言うのも変ですが、大変だったのではないかと思います。制作への想いや配慮した点などをお聞かせください。

(みえ) 自分はイラストレーターというよりはデザイナー寄りの人間であると思っています。そう言う意味で、グラフィックデザイナーとイラストレーターの両方の要素が備わっている「グラフィックイラストレーター」と自分のことを呼んでいます。

依頼者の方のイメージするものを、より要望に沿った形で視覚化することに注力しています。なので、依頼者の方へのヒアリングをととても重要視しています。依頼する側の想いや伝えたいメッセージを理解せず制作した制作物は「独りよがり」なものになってしまい、その結果、『ビジュアルコミュニケーションとしての役割』を全く果たさないものになってしまうからです。



写真

はんとれーみえさんに制作していただいたリーフレットに掲載しているCWS MAP

©CWS Japan

ヒアリング後は、リサーチとブレインストーミングをとおして、イメージをより具体化させていきます。例えば、今回のCWS Japanのリーフレットのために描いたイラストマップだと、世の中にどのようなイラストマップがあるのか調べ、そこからイラストのタッチや色使い、テキストチャー、線の強弱、文字の形

などを観察します。調べながら、色んなアイディアがでてきて、今回のビンテージ調のイラスト案ができました。

自分が持っている憶測だけでなく、相手のニーズを正しく把握することは、きっと人道支援と一緒にですね。

(ニシ) おっしゃる通りです。ニーズを正確に把握してこそ、どのような支援をどうやって届けるべきかという議論ができます。こちらがやりたいこと、できることの押し付けではなく、求められていることを理解して、その実現に向けて、どのように効果的に関わることができるのかをCWS Japanは考えています。チームの人数もそんなに多くないので、ニーズにこたえるためには、さまざまなパートナーとの連携が重要で、団体として大切にしているアプローチです。

みえさんには、コミュニティ・カフェ@大久保のロゴもデザインしていただいています。CWS Japanの活動で印象に残っていることなどあれば教えてください。

(みえ) わたしはデザイナーなので、デザイナーとしての視点から言うと、CWS Japanのinstagramは、ビジュアルが統一されていて、メッセージ性が強く、きれいにまとまっているように見えました。人の顔が見えたり、インタビューの投稿もありますが、それらから人とのつながり、ネットワークを重要視していることがわかります。コミュニティ・カフェ@大久保の活動も活発的で楽しそうなイメージが伝わってきました。

リーフレットのイラストマップ制作の過程においては、ニシザワさんが逐一チームの意見を聞いて、議論して、意見をわたしに共有してくれました。それがとても印象的でした。企業との仕事となると、大抵はデザインの最終版がでてくるまでは、担当者だけが関わり、最終的な決済の時に上司の方が入ってくるのですが、ニシザワさんからは、すべての過程でチームからの多様な意見を共有してもらいました。

団体として、外部のパートナーだけではなく、チームも大事にしているのだなと思いました。CWS Japanが人と人とのつながりを大事

にしながら、一つのをみんなで作り上げる、そういうアプローチがCWS Japanの魅力でありブランドパーソナリティーになっているように感じました。



写真

はんとれーみえさんに制作していただいたリーフレットに掲載しているカットイラスト ©CWS Japan

(ニシ) みえさん、ありがとうございます！
そのように思っただけでいたとは知らず、とても嬉しいです！また、これからもデザインの力を通して、CWS Japanの活動にお力添えいただけると、とても嬉しいです！！日本に帰国する際は、是非コミュニティ・カフェ@大久保でお茶しましょう！

インタビューに答えてくださり、ありがとうございました！

CWS Japanの活動と目指すインパクトをもっとわかりやすく

これからもCWS Japanは多くの方々にわたしたちの活動やそこから生まれるインパクトを分かりやすく、色んな媒体を通じて、伝えていく努力をしていきたいと思います。

最後になりましたが、団体リーフレットは▶[ここ](#)◀からご覧いただけます。是非、このリーフレットをきっかけに、多くの方にCWS Japanのことに興味をもってくださいと嬉しいです。

はんとれーみえさんの情報
ポートフォリオ

<https://miehuntley.myportfolio.com/work>
Instagramアカウント @mie_huntley

(文：プログラム・マネージャー 西澤紫乃)

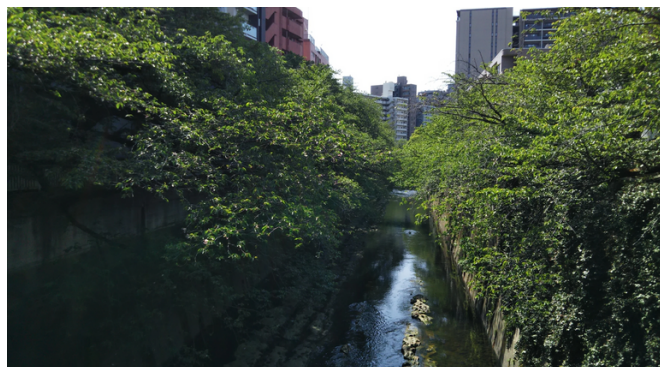
いろいろなことがあったこの数年

慌ただしい毎日のなか、ふとしたときに、この数年のあいだ新型コロナウイルス感染症が世の中に与えたさまざまな影響の大きさは、現実とは思えないほどのものだよなあとあらためて思います。

くわえて、香港、ミャンマー、アフガニスタン、ウクライナ、日本の内外と、自分の身のまわりで起きたことなどからは、自分はこの数十年をとっても楽観的に生きていたんだとすこし茫然としてしまいます。目にするのも辛い、どう捉えればいいのか分からない、なにもできない、言葉もない。そういう瞬間、できごとが、あちこちで多くの人に起きているという当たり前の現実を、以前よりもはっきり見えたような気持ちもするこの数年間です。

しかし同時に、いいなあと感じること、楽しいこと、笑顔になることも、あちこちにあり、それは言われるように、特別なもの・ことではなく普段からあるものだったりとも思います。

最近では、スーパーで買った総菜がすごく自分の好みだったり、応援した人が目標を達成したり、事務所近くの神田川の、花は散ってしまったものの新緑が瑞々しい桜並木と、それを見て「そうかそろそろアジサイがあちこちで咲き始めるなあ」とふと思ったのもちょっとした気持ちのいい瞬間でした。



写真

神田川と緑の桜並木

美術・芸術についてとくに興味をもっていなかったのですが、新型コロナウイルス感染症拡大のころから触れる機会が増え、今ではまったく知らない広く深い別世界を知ることができる楽しみのひとつになりました。

最近では、普段は海外にある数百年前に描かれた超絶技巧ぎこうの絵画を、電車にしばらく乗るだけで観ることができ、とても贅沢な時間でした。身のまわりや、大きな都市に住んでいるからこそ「もの・こと」を、リラックスして楽しめる春・夏にしたいなあと思います。



写真

今年もそろそろですよ

(文：管理業務マネージャー 高松知文)

過去のニュースレターやインタビュー記事は下記よりアクセス頂けます。

過去のニュースレターは[こちら](#)



インタビュー記事は[こちら](#)



上島 安裕 様 | 一般社団法人ピースボート...
7月 07, 2021 ■ パートナーの声



堀内 英様 | 特定非営利活動法人 国際協力...
7月 07, 2021 ■ パートナーの声



眞弓 孝之 様 | 国土防災技術株式会社事業...
6月 06, 2021 ■ パートナーの声



中村 清美 様 | 国土防災技術株式会社国際...
6月 06, 2021 ■ パートナーの声

ご高覧頂き有難うございます。次回のニュースレターは6月末の発行を予定しています。

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)